極印沢の稲荷神社

大坂の商人高岡八右衛門は正直な人で、また妻も賢くやさしい女だった。貧しいながらも二人でむつまじく諸国を行商していくうちに、一心に家業に精励した結果から、しだいに使用人の数もふえ裕福な身代となっていた。

そんな八右衛門が大坂の自宅の奥座敷で仕事をしていたときのことだった。いくら妻を呼んでも返事がないので、ふと庭先を見ると木立の茂みに一匹の年老いた銀ギツネが寝ていた。八右衛門は驚いて追い払おうとしたと

ころ、目を覚ましたキツネはなんと妻の姿に変わった。夫に正体を見られたキツネは哀願するように涙を流しながら、こういった。

「ああ八右衛門様、とんでもない姿をお見せしました。じつは私は出羽の国阿仁の荘極印沢の生まれであります。人に化けてあなたと一緒になり長年つれ添い、深い愛情をお受けいたしましたのも何かのご縁ではありましょうが、いまの醜い姿をお目にかけた以上、もはやこれでお別れでございます。あとに残る二人の子供、なにとぞすこやかにお育てくださいませ。いままで受けたご恩は一生忘れません。いつかよい折を見て米代川の上流阿仁の極印沢をお訪ねください」

八右衛門ははじめ驚いたが、そのうち長年の愛情が胸に迫り、何度もなだめたが、キツネは無言のまま頭を垂れているばかりだった。そして、翌日から妻の姿はなかった。

妻の最後の言葉を胸に焼きつけながらも月日は流れ、二人の子供たちもやがて一人前の若者になった。そこで、二人に家を譲り、八右衛門は極印沢をめざして旅立った。かわいい妻に会える楽しみは長旅やけわしい山路の疲れを感じさせることはなかった。こうして荒瀬村にたどりつき、村長の家に一夜泊めてもらい、いろいろな土地の話などを聞いた。そしてまた奥へ奥へと深山を分け入って行った。歩いてもあるいても山は続いた。

どのくらい歩いただろうか、けわしい山道でさすがの八右衛門も疲れてしまい、かたわらの木の根に腰をおろすといつのまにか眠りに落ちてしまった。どのくらい眠ったのか定かではないが、サーッと吹いた一陣の風で八右衛門は目を覚ました。すると、待ちに待った妻の恋しい姿が忽然と目の前にあらわれたのである。八右衛門があまりの懐かしさにわれを忘れて抱き寄せようとすれば、

「あなたの来る日をどれだけお待ちしたことでしょう。あなたに私の姿を見られて、二人のわが子を捨てて郷里の草むらに帰って来ましたが、忘れることができなくて二人の子供の成長するのを遠くから見守っていました。いま、あなたに近づくことは心苦しいことですが、愛慕の情を止めることはできずに、こうして恥をしのんでお目にかかりました。私はこれまでのご恩のお返しに宝をお見せしましょう。じつはこの山は銅山なのです。東の山を見てください。金色に輝いて見えるのがそうです。私はもうお会いすることはできません。二人の子供はよろしくお願いします」

妻の姿はそういいながら消えた。八右衛門は唖然としながら、ただ立ちつくすだけであった。

ようやく気を取り直してキツネがいまいった山へと向かい、東の山へ登ると、その言葉どおり金色に輝く岩があった。こうして八右衛門はキツネによって銅山を発見することができたのである。これが阿仁銅山の始まりで、その後、八右衛門は妻と会ったところに稲荷神社を建て、キツネの霊を祀った。